

ニューオーリンズと三宅島をつなぐ風

～災害に学ぶプロジェクトニュース4月29日号～

いよいよ今日からプログラムの初日が動き出します。

昨年の9月に訪れた時とは違い、観光シーズンも重なって街中は賑やかな空気が漂っています。天候は晴れ。旅を後押しするような気持ちの良い風の中、これから始まる旅の途中での素晴らしい出会いに期待をふくらませて、さぁ出発です!! (坂上)

開かれた「窓」と「窓」から見えるもの

プロジェクト第1日目、ニューオーリンズは快晴。少し肌寒さを覚えるが東京では感じられない爽快な朝だ。

成田からシカゴまで12時間。シカゴでの8時間の待機。疲労困憊したメンバーもいたが(私がそのさいたる者か?)、この朝の素晴らしいさはどうだ。

朝に包まれて私たちの乗ったバスは「ファーマーズマーケット」に向かった。マーケットはミシシッピ川の近くで、チューレン大学の駐車場の一角にある。

白い5角形のテントが並び、すでに多くのお客さんにぎわっている。私たちを迎えてくれたのは、リチャード・マッカーシーさん。マーケットプロジェクトの専務理事。「カトリーナ」で被災した農民や漁業に携わる人々の生活再建をいち早く支援した人だ。

マーケットの原則は、自ら生産したものを消費者に提供すること。テントの周りには車が並び野菜や果物、惣菜などが店に並び車の中で次々に店頭へ並びのを整然と待っている。

マッカーシーさんは印象的な言葉をいくつも私たちに残したが、その一つは「カトリーナは大きな苦しみを人々に与えたが、カトリーナによっていくつもの窓が開けられた。日本の三宅島支援の皆さんとこうして出会えたのも、その窓の一つ。開いたたくさんの窓を大切にしていきたい」

私たちも三宅島支援によっていくつもの「窓」を開くことができた。「窓」と「窓」は決して閉ざされることはなく、新しい窓を次々に開いていくことだろう。また彼は、マーケットは「人間としての自立性を取り戻すためのしくみ」とも語った。災害支援における人間としてのポジションは、どこの国においても大事なものであることを実感した。

三宅村の平野村長は、昨日のハードな時間の経過にもかかわらず、今朝は早く起床し2kmを走られたとのこと。生活再建のリーダーの力強さに失礼ではあるがホッとした思いを記して第1日目のレポートを終える。

(生原)



マーケットアンブレラでは、オープンの合図として、朝9時に鐘を鳴らす。今日は訪日団の平野さんが鳴らした

ルイジアナ ゴールド

レッドフィッシュグリンで食べたエビは「ルイジアナゴールド?」。マーケットアンブレラや3年を経てもまだカトリーナの傷跡が残る住宅街を案内しながら、その話をしてくれたのは、ファーマーズマーケット運動を率いる好漢リチャード・マッカーシーだった。真水と海水が微妙に混ざりあう河口独特の甘くて柔らかなエビの“いみな”であり、棧橋を奪われた漁師にとっては生活の糧であるばかりかゴールドのように輝く誇りでもあるのだ。

多様な人種が群れあうニューオーリンズは、土着的で頑固な街だ。“故郷は遠くにありて思うもの”と詩った詩人の魂に触れて田舎を捨て大都会の片隅に生きる僕には故郷を論ずる資格はないのかもしれないが、ニューオーリンズの若者の多くが一度は街を捨てても、この街に生まれ育った者の多くにとってニューオーリンズは帰るべき場所であった。リチャードも帰ってきた。

カトリーナは、道で寝る人にも、豪邸にくらす人にも一応に襲いかかった。住宅の多くは空き家のまま放置され、家のない人々が住み着き“家族”という幻想を紡いでいる。だが、カトリーナは檜の葉を一時的に枯らしはしたが、檜の巨木を根こそぎにすることはできなかった。檜の巨木の枝々ではまるで乙女たちが恥らうように新緑が葉うらを返している。その風に耳をすませば、マヘリア・ジャクソンの悲しくも力強いゴスペルが聴こえてきそうだ。そう、好漢リチャードは独りではない。ニューオーリンズという伝統に導かれて、マーサ・ケゲルやマリオン・テラーそしてマグノリアヴィラの人々と共にクレセントシティにかかる三日月がいつの日かゴールドに輝く日を夢見ているはずだ。

(成清)

UNITY訪問

ニューオーリンズでホームレス問題への取り組みをリードしているUNITY(ユナイティイ)が運営するUNITYハウジングを訪問し、事務局長のマーサ・ケゲルさん、事務局のフランス・マイゼンハイワーさん、同ハウジングでプログラムを運営しているアリーシャさん、そしてホームレス問題に取り組むNPOで世界的にお手本となっているニューヨークのコモンランドのロザンヌ・ハガーティー理事長の話を聞き、質疑応答を行った。

話の内容および質疑応答での中身は非常に有意義なもので、問題点および新たな発見、そしてこれからの課題についてよくわかる説明であった。

まず、自然災害対策における政府や自治体の役割についての議論となった。これまでも良く言われていることだが、ハリケーンカトリーナ後の連邦から地方政府まで対策が後手後手に回ったとあるが、ケゲルさんやハガーティーさんの話を聞かざり、対策が遅れたとい



UNITY 事務局の喫煙場所での一コマ。昨年お会いした方と再会することもできた

うよりも、想定外の出来事が起こったので、何をしたら良いのかわからない状態が続いていたように思われる。補助金や税制面でのサポートなどで、被災者への生活支援やインフラ整備などの対策が本当に必要な地域や人口グループに行われてこなかったようだ。政府や自治体における災害対策体制がどの程度であったのかについては、ニューオーリンズ市とのミーティングでより明らかになると思うが、少なくとも、市や州あるいは政府は市民レベルでの状況を把握していなかった。また、今後同様の自然災害が起こった場合を想定して官・民が丸となって事前対策を立てているという感じもしなかった。

次にホームレスの問題であるが、ハリケーンカトリーナ前後でホームレス人口が6倍にも増加したことから、ホームレス問題の深刻度合いがわかる。ホームレスの状況も、経済的に陥ったというよりも、カトリーナの避難中に住む場所を失った人々が戻ってきてホームレスになったり、また、高齢者の割合が増えてくるなど、ニューオーリンズのホームレス状況は特殊な状況のようだ。

最後に企業との連携である。UNITYの活動の9割以上が政府からの補助金で成り立っている。民間の財団や個人からの助成は1ケタ代台である。また、貸し出す住居から得られる家賃収入は1%にも満たない。つまり、UNITYの活動に政府の補助金は欠かせないのが現実である。それでは、企業の役割はどのようなものなのであろうか。具体的には直接お金を出すよりも、住居用のビルを借りたり購入したりという点で協力をしたり、間接的な資金支援や現物での支援などが行われているようだ。

ニューオーリンズ初日を終えての一言としては、「カタル政府」ということであろうか。午前中に訪れたクレスセント・シティー・ファーマーズ・マーケットにあったクリニック用バスの寄付、そして、ケーゲルさんが途中退席して参加したカタル政府のホームレス対策向け助成を祝うレセプション参加など、多方面で注目を集める中東のカタルがここニューオーリンズで非常に身近な存在として感じられることになった。これもニューオーリンズが苦しみながらも、いろいろな機会を好機に捉え、着実に前進している証左に感じられる。

(雨宮)

同行取材で参加

長崎名物ちゃんぽんなどB級グルメが大好きな私。「言葉ではうまくいえないよね」などと言いながら妥協したグルメロケから帰り、試

【4月29日行程】

- 午前 マーケットアンブレラ見学
リチャード・マッカーシー氏との意見交換
ニューオーリンズ被災地バス視察
- 午後 UNITY 施設見学
マーサ・ケーゲル氏との意見交換
ロザヌ・ハガティ氏との意見交換

写室で「全然伝わらないね～」と軽く言われ、自己嫌悪に陥るのも私です。しかしここニューオーリンズでは、ガンボもオイスターも「GOOD」「NICE」でOK。それで十分な気がするし、人懐っこいニューオーリンズっ子の笑顔がそうを言わせているのです。歴史と確かな食材に裏打ちされた美味を噛み締める至福の時間。一方でその足元では貧困による肥満が増大。低所得者向けの食事補助「フードスタンプ」で低価格・高カロリーの外食でとにかく空腹を満たすというが少なくないといえます。そのフードスタンプが、リチャード・マッカーシーさんの農民市場で使えるようになったのはとても興味深いことです。農家のおばちゃんは、私が「Is it delicious? 」とたずねると、聞き取れないくらい早い早口でいろいろ教えてくれます。トマトもブルーベリーも新鮮そのもの。スタンプを握り締めていつもビッグマックをほおぼっている兄ちゃんもわかるはず。マッカーシーさんはカトリーナ被災地を案内しながら「近年市民は、自分たちは自然を統御できると思ってきた」と述懐しました。ファストフードに代表される「工業化された食文化」には「旬」や「不作」がない分、妄信を膨らませるひとつの要因になっていなかったか。食文化の豊かさは、自然への畏敬の念に通じるのではないか。そう感じました。低所得者層にも農民市場が浸透し、栄養満点の食事を取り、心から「GOOD」を言えるニューオーリンズ市民が増えることを願ってやみません。

**今回の同行取材は「ラジオ特集

温暖化時代の水害にどう備えるか」として6月5日午後8時5分からラジオ第1で放送いたします。ぜひお聞きいただき教授賜ればと思います。

(井原 NHK 福岡放送局アナウンサー)



ニューオーリンズ初日。抜けるような雲一つない青空となった。

<編集後記>

ニューオーリンズ初日。朝から本当に雲一つない青空となりました。ニューオーリンズまでの道中が過酷だった(日本から約25時間の移動!)こともあり、ホテルに着いた際はクタクタになってしまった私たちでしたが、今朝の青空を見て、気持ちが洗われる気がしました。何だか、このことだけで素晴らしい成果が得られる期待が膨らみました。

今回の訪米団13名の内、7名は昨年9月の東京災害ボランティアネットワークの訪米ツアーでニューオーリンズには訪れています。約半年ぶりのニューオーリンズというわけです。

このニュースでは、訪問先の報告はもちろんのこと、半年ぶりのニューオーリンズの印象や、それぞれが感じた雑感などをつつっていきます。限られた分量のニュースなので、その全ては掲載できません。しかし、これから5日間、僕たちが得られるたくさん気づきを、読んでくださる皆さんと一緒に共有できればと思っています。